

第1回

千葉氏サミット

●千葉氏郷土史トークセッション

テーマ「検証 全国各地の千葉氏文化」

■パネリスト

- ① 佐藤 育郎(一関市 いわて東山歴史文化振興会会長)
- ② 櫻井 伸孝(涌谷町 涌谷町文化財保護委員長)
- ③ 岡田 清一(相馬市 東北福祉大学教育学部教授)
(史跡中村城保存管理計画策定委員会委員長)
- ④ 金子 徳彦(郡上市 大和町文化財保護協会副会長)
- ⑤ 岩松 要輔(小城市 小城郷土史研究会会長)
- ⑥ 土屋 清實(東庄町 東庄郷土史研究会顧問)
- ⑦ 遠山 成一(佐倉市・酒々井町 佐倉市文化財審議会副委員長)
- ⑧ 鈴木 佐(多古町・千葉市 千葉氏研究家・建長寺調査員)

■コーディネーター

- ・濱名 徳順(千葉氏顕彰会副会長)

■平成28年8月21日(日)

■三井ガーデンホテル千葉

一 関 市 資 料

佐藤 育郎(いわて東山歴史文化振興会会長)



① 千葉氏との関わり、どのような契機で、いつまでか……

文治5年（1189年）鎌倉の頼朝公の軍28万と平泉藤原氏四代泰衡公の軍17万との合戦で、まだ平泉が完全に敗れたと決まらない戦いの最中、鎌倉側と平泉側との最大の合戦地となった現在の福島県北部阿津賀志山の戦いで大勝利した頼朝公は直ちに千葉常胤公の娘婿葛西清重公を東北全体の奥州総奉行に任命しました。間もなく平泉は滅び、黄金の平泉藤原三代は滅亡しました。滅亡した一年と経たない年号変わっての建久元年には常胤公の子息や縁者が次々と東北中部に土着しました。その有力な武将のひとり常胤の息子頼胤が平泉と束稲山ひとつ隔てたところの唐梅館（長坂城）に入り現在の岩手県金ヶ崎町附近の江刺百岡城と共に、平泉滅亡から天正18年（1590年）、秀吉の小田原攻めの時代まで21代400年間千葉一族の時代であり東北地方1200年の歴史の三分の一を千葉氏が統治しました。

② 千葉氏の残した有形・無形文化遺産は……

先ず、開田・開畑が挙げられると思います。肥沃で広大な北上川兩岸一帯に長い年月をもって拓いた田畑がやがて江戸時代となり仙台藩62万石の基となりますが、葛西・千葉一族の分として少なく勘定しても20万石分の領地となります。現在の一関市はそのうちの約6万石となります。このことは今ある東北の農業基本であり最大の財産であります。ほかに漆工芸、鉄文化芸能文化などと、その時代の名将に現一関市内だけでも大東町山吹城主大原飛驒守、川崎町薄衣城主薄衣甲斐守は東北の名将方であります。

千葉氏、葛西氏の末裔の歴史的人物は、東北地方はもとより、全国に沢山でございます。武士道の千葉周作、和算家の千葉胤秀、学者医者である玄沢・磐溪・文彦はじめの大槻一族、国際人新渡戸稲造をはじめ数えきれない程の歴史的人物が山々であります。

③ ②の関係、今どこで見られますか

一関市の北と南の地域で葛西氏・千葉氏の居住地その居館址は調査記録では数百ヶ所もあります。しばって現一関市内だけでも大小195ヶ城もあります。常時わずかな家来だけの館が沢山あった訳ですが、しかしその館ごとに千葉氏一門一家の使命と誇り思い乍ら郷ごと村ごと千葉氏は400年間岩手県南、宮城県北一帯に輝きました。千葉・葛西一族が庇護した神社やお寺も沢山ございます。

涌谷町資料

櫻井 伸孝(涌谷町文化財保護委員長)







相馬市資料

岡田 清一（東北福祉大学教育学部教授）
（史跡中村城保存管理計画策定委員会委員長）

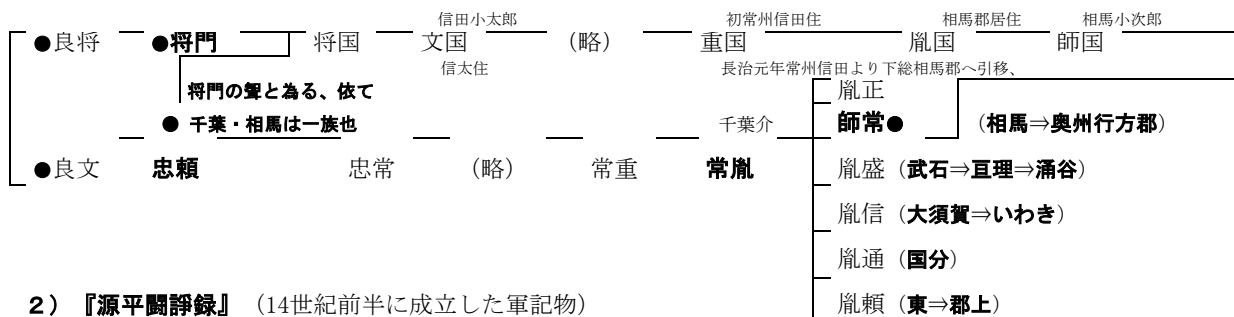
相馬野馬追いと妙見信仰

— 千葉氏と相馬氏 —

岡田 清一（相馬市）

I. 千葉氏と相馬氏

1) 相馬之系図（相馬市・歓喜寺蔵／寛永19年〈1642〉成立）



2) 『源平闘諍録』（14世紀前半に成立した軍記物）

「妙見大菩薩の本地の事」

- ・将門、妙見の御利生を蒙り、五ヶ年の内に東八ヶ国を打ち随へ、下総国相馬郡に京を立て、将門の親王と号さる。（略）神慮をも恐れず、朝威にも憚らず、仏神の田地を奪い取りぬ。
- ・故に妙見大菩薩、将門の家を出でて、村岡の五郎良文の許へ渡りたまひぬ。良文は伯父たりといえども、甥の将門が為には養子たるに依って、流石他門には附かず、渡られたまいし所なり。

3) 相馬氏と奥州移住

下総国相馬郡（柏市・我孫子市／取手市・北相馬郡利根町）

鎌倉時代末期・行方郡（南相馬市）移住（⇒奥州相馬氏）⇒宇多郡（相馬市）へ → 相馬中村藩

・相馬郡に残った相馬一族（⇒下総相馬氏） → 旗本／小田原藩・彦根藩の家臣

II. 相馬野馬追いと妙見信仰（『原町市史 10 特別編／野馬追』／南相馬市史）⇒平将門以来の行事と伝える

1) 利胤朝臣御年譜（慶長2年〈1597〉）

一、五月、（略）牛越御在城の節、例年野馬追の時、野馬掛共に牛越の城にて相済む。

2) 義胤朝臣御年譜（寛永14年〈1637〉）

一、六月十三日、野馬追御出陣、十一日、中村より原町へ御出馬、十一日・十二日惣侍原町へ相詰め、十二日宵追、十三日野馬追（⇒野馬掛）

3) 「紙本着色千葉妙見大縁起絵巻」（千葉市・栄福寺）⇒「紙本着色千葉妙見寺縁起」二巻（相馬市・歓喜寺）

4) 『奥相志』宇多郷中村 妙見祠 当社は千葉・相馬累世の鎮守なり。祭神は北辰星王にして、或は北斗七星と云ひ、或は九曜と云ひ、（略）

常胤公の次子相馬次郎師常公、将門公の正統相馬中書師国公の嗣となり総州相馬郡に居城す。公特に妙見を崇敬し、千葉より神体を相馬に迁し、祠を建ててこれを安んず。これ則ち良文以降尊崇するところの神像なり。

5) 現在の野馬追い

明治4年の廃藩置県⇒同年陰暦5月13日（中の申の日）に執行（太田神社・旧藩士）⇒小高・中村神社
三妙見神社合同行事（太陽暦の7月1～3日）⇒7月最終土曜日から三日間
昭和27年6月 無形文化財 ⇒ 昭和53年5月 国の重要無形民俗文化財に指定

現在の野馬追行事

相馬野馬追運営委員会・相馬野馬追執行委員会・相馬野馬追保存専門委員会・相馬野馬追振興対策検討委員会
平成28年7月23日（宵乗り行事）⇒24日（本祭）⇒25日（野馬懸）
五郷（宇多郷〈相馬市〉／北郷・中ノ郷・小高郷〈南相馬市〉／標葉郷〈浪江・双葉・大熊・葛尾等〉）騎馬会

郡 上 市 資 料

金子 徳彦(大和町文化財保護協会副会長)

郡上東氏

代々和歌に優れ、9代目・東常縁
(とうのつねより)は古今伝授を確立

郡上東氏

○千葉常胤の六男胤頼
が独立(下総東氏)

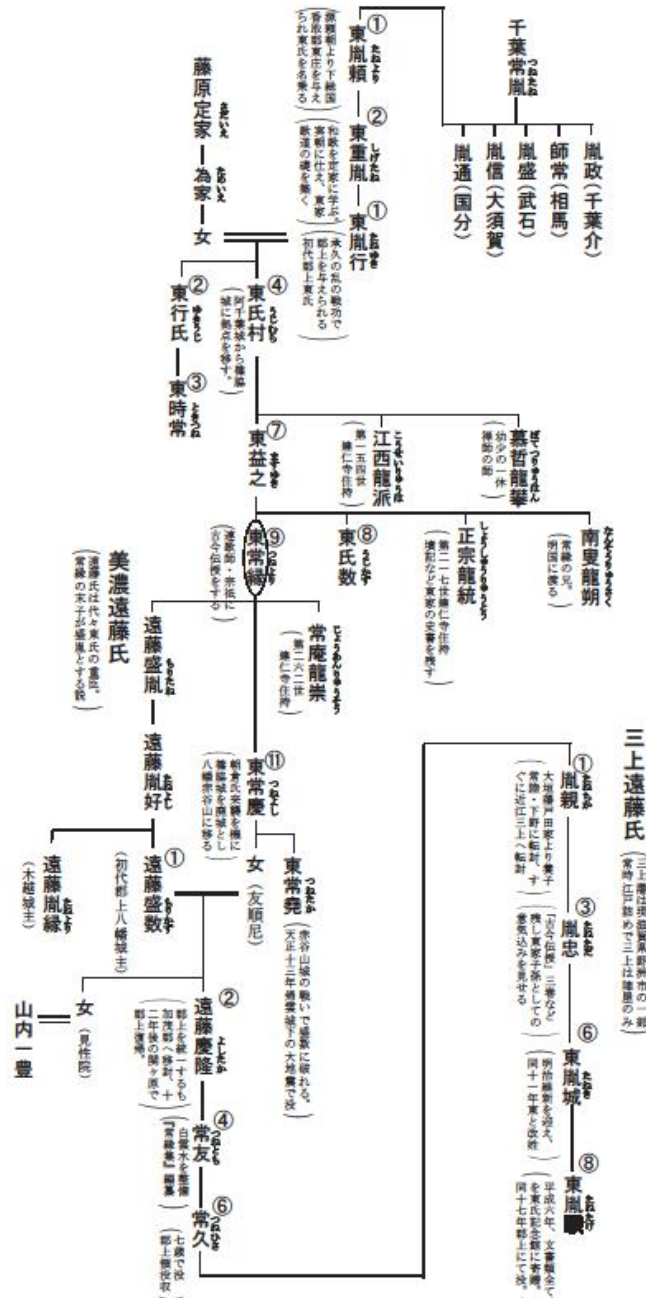
○三代・胤行の時、郡上
山田庄を加領され移る

○和歌の家柄一古今伝授の祖

○多くの五山文学者を輩出

○後、郡上八幡に移り、一族の
遠藤氏に取って代わられる

●東氏 & 遠藤氏略系図



古今伝授の里とは。



- ・古今和歌集(全20巻1100首)の奥義を伝えること＝歌道伝授
- ・郡上東氏の第9代常縁は、連歌師宗祇に古今伝授をして、その形式を確立＝「古今伝授の祖」と呼ばれる



230年間の居城＝篠脇城



明建神社の七日祭り



昭和54年一東氏館跡が発見される 発掘された庭園が国の名勝に指定



能「くるす桜」(別名:常縁)を復曲
昭和63年から明建神社に奉納。



町づくりの拠点施設 古今伝授の里フィールドミュージアム





小 城 市 資 料

岩松 要輔(小城郷土史研究会会長)

肥前千葉氏と小城

小城郷土史研究会会長 岩松要輔

(1) 小城祇園山挽き 700 年記念行事

(2) 肥前千葉氏の発展

- | | | |
|-----------------|---------|------------|
| ① 肥前国小城郡惣地頭職 | 千葉常胤 | |
| ② 元寇と千葉氏 | 千葉頼胤、宗胤 | |
| ③ 千葉氏の土着と勢力伸長 | 千葉胤貞、胤泰 | 河上神社大宮司職 |
| ④ 肥前国府小城、国主千葉氏 | 千葉胤鎮、元胤 | 鍋冠日親 海東諸国紀 |
| ⑤ 龍造寺・鍋島氏の勃興 | 千葉氏の分裂 | |
| ⑥ 鍋島藩体制と千葉氏（着座） | 千葉胤連 | |

(3) 肥前千葉氏研究と町おこし運動

- | | |
|--------------------------|---|
| ① 小城郷土史研究会の活動 | 昭和 41 年発足 機関誌小城の歴史 史跡探訪
ふるさとの歴史、小城歴史読本、小城町史 |
| ② 肥前千葉氏調査委員会の活動 | 中世肥前千葉氏の足跡（小京都小城的源流）

・野口実先生
・宮島敬一先生
※石井進先生 |
| ③ 千葉氏関係遺跡の発掘と出土遺物展示 | 北浦地区、高原地区 |
| ④ 町おこし運動と必要とされた歴史的背景 | 中心市街地活性化事業 |
| ⑤ 屋根のない博物館（小城どこでんミュージアム） | 小城市立歴史資料館中心 |

岩松要輔氏資料



須賀神社(祇園社)

肥前千葉氏の居城 千葉城



小城町の北部にある。北部九州でも最大級の山城。城内には堀跡、曲輪跡が残り、中世の山城の姿を留める。
麓には館跡や城下町の遺跡が残る。

祇園祭に関するシンポジウム



今年は山挽祇園祭が始まって700年。さまざまなイベントが市民の手で行われた。写真はシンポジウムのようす。7月2日開催。

史跡探訪会のようす



平成27年度に行った佐賀大学との交流事業「小城祇園祭」では、郷土史研究会の案内で千葉氏ゆかりの地を案内した。写真は光勝寺。

東 庄 町 資 料

土屋 清實(東庄郷土史研究会顧問)

東氏の活躍

——雄姿そして優雅——

平成28年8月

東庄郷土史研究会

土屋 清 實

一、東氏誕生

父千葉常胤より子息らは北総地域を受けついだ。長男胤政、千葉氏本家つぐ。次男師常、手賀沼西部台地一帯。三男胤盛、現幕張。四男胤信、現大栄町。五男胤通、現市川市国分。六男胤頼、現東庄町と近隣、銚子市。

胤頼が東を姓とするようになったのは文治元年（一一八五）、平家滅亡直後のようである（二）。この資料には東庄町の総鎮守東大社の第五〇代兼廣宮司の時、千葉胤頼が森山城に拠り、東六郎と称し宮司の姓、東を変えてくれるよう知ら

せた。そこで母方姓 畦蒜^{あびる}をしばらく名乗った。第六四代種正宮司から飯田姓になった。元和四年（一六一八）であった（森山城の地帯は飯田郷と称した）

胤頼は前掛城に拠っていたが（現旭市最北端地域）文治元年（一一八五）須賀山城を築き、さらに隣接してすぐ西に建保六年（一二一八）森山城を築いたと伝わる。現在須賀山城跡がJR笹川駅南約1kmの高台（笹川根方地区）にあり、から堀と土塁がある。森山城は広々としていたとかがえる。農地として今、利用されている。（現香取市小見川）。

二、以後東氏の行動 風雅のはじまり——重胤

胤頼の長男重胤は源実朝（三代将軍）の時代に鶴岡八幡宮での流鏑馬奉納で大役を果たした。また京に上り、和歌を名門藤原定家に学んだ。このころ実朝の後見は頼朝の妻政子の実家北条氏の執権、義時で将軍は政子の系統。以降適宜の将

軍。(二代將軍の頼家は北条氏と意見が合わず伊豆修善寺に

三、承久の乱(一二二二年)

閉じ込められ、自害して果てた)。そうすると実朝は飾り物

後鳥羽上皇は討幕の意を強め朝権復歸に諸国に号令した。

で、和歌ばかり詠んでいた。重胤は和歌風雅の京を知り將軍

幕府これを知り京に上り上皇をおさえてしまった。上皇は隱

実朝から親しくされ、常に行動を共にした。重胤が休暇で東

岐島へ流された。この時の功勞で東氏三代の胤行は美濃国山

庄に歸り、しばらくすると実朝は重胤に会いたくなってきた

田庄(現岐阜県郡上市)を加領された。こうして東氏の主力

「今来むと たのめし人は見えなくに 秋風寒み かりは

は美濃に移り東庄はさびしくなった。胤行の長男泰行が下総

来にけり」と重胤に催促した。やがて鎌倉に戻り和歌献上(三)

東氏後裔は鹿島神宮の宮司へとつづいた。(四)

謹慎させられたが忠誠につとめ「無双の近侍」といわれた。

胤行も名門藤原家と縁を結び(定家の子為家の娘を妻にし

その重胤が鶴岡八幡宮での実朝拝賀の式(右大臣に昇格)に

た)和歌をよくした。勅撰和歌集に多く選ばれた。

参列した。悲運にも実朝は公暁にあやめられてしまった。公

四、またまた悲しい宝治合戦(一二四七)

暁は二代將軍頼家の子。重胤はこの事を悔やみ仏門に入った

政子の父北条時政 初代執権より五代目の時頼は三浦氏の

「覚然」と号したのである(頼朝の長男は頼家、次男は実朝、

泰村が反時頼であると感じ、討ってしまった。これから東氏

公暁は北条氏にあやめられ、源氏三代で終わり、政權は北条

に災難がふりかかっていた。三浦泰村の妹の婿は上総秀胤で

氏に移った。東氏は北条氏に従って行動した。

ある。秀胤の三男、泰秀の妻は東胤行の娘である。

男子は森山城で生まれた。秀胤と胤行は親戚（五）

時頼は三浦氏と関わる者は討てというのである胤行の心さぞかし重かったとうかがえるが忠誠を尽くすため、秀胤の館に行った。そこは大柳の館（現千葉県睦沢町）到着すると館に火を放った一族は皆最後をとげた。時頼は胤行に恩賞を与えようとするが胤行は辞退し、ただ孫の命だけはと願ひ許された。お産は森山城だったので胤行は早速命じて乳飲み子の孫と乳母、家来たちに北へ向かわせた。東北には東の姓があり、青森にはかなりの名家がある。

五、美濃山田庄へ胤行移り築城

建長元年（一二四九）胤行と三男の行氏は山田庄で阿千葉城を築いた（現郡上市大和町、郡上八幡の北）地元ではあぜち千葉^ミといった。後にこれがつまってあちば^ニ阿千葉になったということ。この城には行氏の次に時常。氏村になって

少し南の篠脇城に移った。胤頼から六代目（六）。

六、建武の中興（一二三三→二年半）足利政権へ

第九六代後醍醐天皇は鎌倉幕府を倒し天皇親政を復活させた。時に元弘三年（一二三三）。ところが武家政権を望む武士達がいた。足利尊氏はそのまま鎌倉にとどまり、新田義貞とも確執した。こうして義貞と主導権争い。足利政権合法化に後醍醐天皇（南朝）より北朝の光明天皇へ神器授受を行った。実は偽物。（七）。建武三年（一二三六）室町幕府開始、氏村や千葉氏は新田義貞と北陸官軍の力を盛り上げようとした。同年（一二三六）、途中の木芽峠で大雪の足利側地域へ迷い込んでしまった。約五百人もの軍勢。足利側の熱意あるはからいで足利側についた。自害しようと義貞は考えたが、大軍であつたので思いとどまった。

氏村は詩をよくし勅令で次のように歌った。

鳴神の音はそこもなかりけり

くもれる方や夕立の空（鳴神・・・雷の音）

七、千葉氏の内紛（応仁の乱（一四六七年）から

十年間、東氏十一代常縁の役目

時代はくだり東常縁は幕命により康正元年（一四五五）

東庄に下向。千葉氏の内紛をおさめるため、東大社に詣で

戦勝祈願をした。

静かなる世にまた立ちやかえらん

神と君とのめぐみ尽きせず

千葉氏一六代胤直の時代で胤直の配下（二派原胤房対円城

寺尚住）が勢力あらそいし、千葉氏実権の弱体化。紆余屈折

し馬加城主康胤は胤直の叔父で、すきをみて千葉宗家となつ

てしまった（千葉氏一八代）。（馬加は現千葉市幕張）。胤直

は自害して果てた。

さて常縁は早速、下総中の兵を集め、馬加城を攻めた。翌

年（一四五六年）康胤は上総八幡（現市原市八幡町）で敗死

した。しかし康胤側の残留軍追討に明け暮れ。京では足利義

政の後継争いとなり義政の子、義尚の側山名宗全と義政の弟、

義視の細川勝元が応仁元年（一四六七）に武力衝突。山名側

は西軍、細川側は東軍（東氏も東軍）。これが応仁の乱とに

なった。篠脇城は西軍の斉藤妙椿に落城させられた。時に一

四六八年。常縁の兄、氏数が守っていた。妙椿は常縁に和歌

を詠んでよこせばと伝えてきた。これに答えて早速送ったの

である。十首も詠んだという。いくつか次に

思いやる心の通う道ならで

たよりもしらぬ古郷のそら

我世経むしるべと今も頼むかな

みのお山の松の千とせを

木の葉ちる秋の思ひにあら玉の

はるに忘るるいろを見せなむ

ではこのくらいにして妙椿も感動し

言の葉に君か心はみづくきの

行くすゑとをらば跡はたがはじ

と詠んで常縁に送ってきたのである。篠脇城も無事返ってきた。
た。

義政で足利氏も十代で常縁、妙椿も入れて三人は歌仲間でもあった。これも幸いしたのであろう。

応仁三年（一四六九）には義政の耳にも入る。―京に着いた常縁はまた妙椿の好意に感じて歌を詠み妙椿に送ったことを。

篠脇城近くに明建神社がある（北極星と同一視した妙見信仰の社である。）

社前には歌碑がある。

花ざかり所も神のみ山かな（常縁）

さくらに匂ふ峯の榊葉（飯尾宗祇）

常縁が*古今和歌集を伝授しその連歌。

常縁は京の歌人や父益之から指導を受けた。*藤原定家の流れ、冷泉派（れいぜい）の古今和歌集も奥秘を極めた。

八、美濃の東氏滅亡へ―政権遠藤氏へ

縁数（二〇代氏数の長男）は東庄、森山城にとどまり下総東氏をつぎ、常縁没後十二代元胤、十三代常慶に至り篠脇城から赤谷山城移った。越前の朝倉軍が篠脇城に攻めてきた。天文九年（一五四〇）で配下遠藤胤頼、同弟盛数ら、よく戦って敵を追い払った。このことがあつて南下、十年に赤谷山

城を築いた（現、八幡町。）ところが常慶の一人息子、常堯は出来のよくない人物だった。遠藤胤頼の娘を妻にと申し込むが断られその後、胤頼をあやめてしまった。

そこで常堯側（赤谷城）と遠藤盛数側（八幡城）が争った。

永禄二年（一五五九年）に赤谷城が落城。常堯は逃亡し、北方の白川で没し、東氏ついに滅亡。政権は遠藤氏に移った。しかし幸いなことに東氏の血脈は遠藤氏に続いたのである。

九、遠藤氏の行方

兄遠藤胤頼が不幸な末路となり、弟盛数が遠藤氏初代となった。実は東氏十二代常慶の養子で、常慶の娘が妻である。武名高い遠藤氏が、その姓で郡上八幡城に拠した。亡兄胤頼の子胤俊に領地半分を（現大和町）自分（盛数）は郡上八幡を領した。（六）

二代慶隆（母は東常慶の娘）以下東氏の血脈が続く。世は

戦乱で斉藤龍興に従い、斉藤、織田信長に降参。慶隆、信長に従った。その後遠藤氏は近江国（現滋賀県野州町に）移り、三上藩主は元禄十一年（一六九八）に野州郡ほかの郡二七カ村一万石を与えられた。（八）。

胤城は明治十一年勅許により遠藤氏から東氏に復した。一代で遠藤の姓は終わった（五）

十、豊臣秀吉 小田原城攻略

東氏の変遷 東庄町へ

豊臣秀吉が天下統一を目指し関東へ進出、天正十八年（一五九〇）に、後北条氏の小田原攻略。関東の大部分は後北条氏の配下で、東氏十七代直胤は千葉連合軍の総大将となり、湯本口で奮戦。千葉氏二十九代の重胤はまだ幼少であった。直胤は討死し、党の血脈は終わったかに思えたが、棟胤がいた。母は東氏十四代常和の妻、父は胤富（後に千葉氏二六代

になった。)棟胤は森山城で誕生(五)。森山城も秀吉に降伏、

平合戦には源頼政の軍に従い戦死。

落城。棟胤四九歳。徳川氏に城を明け渡し美濃に移った。美

(2) 東庄町笹川の諏訪神社の神楽

濃東氏縁数が東庄にとどまり(十頁参照)。今度は棟胤が美

源頼朝の武運長久を祈り、鎌倉幕府創設の一年前からお

濃へ行ったのである(下総東氏十八代)。十九代久胤は美濃

こなわれていると伝わる。

から出羽国長井郷(現山形県)へ。以降ここにとどまり二十

(3) 学僧 龍山徳見(一二八四〜一三五八)

六代則胤が江戸へ出た。後に匝瑳老尾村(現匝瑳市)へ。二

臨済禅のこの僧は東氏一族の出身。東庄町笹川の東方、

十七代将胤、二十八代忠胤は老尾神社の神官を務めた。二十

鹿野戸の龍神山という地名から龍山をとった。学才に秀

九代義胤は日露戦争に従軍。長男孝胤が早世し、次男、保胤

で中国で修業もし、足利直義にも敬意され、建仁寺から

が三十代となり東庄町宮本に住した。東庄の総鎮守、東氏に

天龍寺と住持を務めた(九)。

ゆかりある東大社に近い南に住居がある。三十一代は匝瑳市

終わりに

在住とうかがっている。

以上概略記しましたが主なことは東氏の流れが三系統で

追記

あることです。

(1) 千葉常胤の七男 日胤

即ち初代東胤頼から三代目の胤行から美濃東氏となりま

日胤は源頼朝の祈願僧で現滋賀県大津市の遠城寺住、源

した。胤行の長男の系統が下総東氏、子孫は鹿島神宮の宮司

となりました。小田原合戦で討死した東氏、一七代目直胤（美濃東氏一二代目縁数が森山城にとどまる）。そのため千葉氏より東氏をたてなおし一八代棟胤よりつづき三〇代目、東庄に住んだ保胤氏に至りました。

参考及び引用資料

(一) 千葉県歴史、小笠原長和・川村優著（山川出版社）(2) 森山城主、「東氏」と東大社宮司「飯田氏」飯田武士著（東庄の郷土史第三十号）(3) 東氏と和歌、海上義治著（東庄の郷土史第十三号）東氏八百年史、山田勝治郎識(5) 千葉大系図編集東庄郷土史研究会・発行東庄町教育委員会(6) 東氏ものがたり、編集・発行東氏文化顕彰会(7) 国民の歴史9（文英堂）(8) 東氏、遠藤氏と三上藩見学、野州町立歴史民俗資料館、石毛豊著（東庄の郷土史第十号）(9) 県外千葉氏一族の動向（千葉市立郷土博物館）

美濃東氏後裔、東たか子さん来訪

たか子さんは平成二七年五月二四日鈴木佐さんの案内マイカーに同乗、東庄町公民館で千葉氏、東氏の関係展示物を見学された。次に東胤頼夫妻の墓所に参詣された。そこは森山城跡の南麓須賀山城址近く。私達郷土史研究会会員土屋清實、林俊之、平野剛、土屋博各氏四人もお供したたか子さんは時にはご自分の姓を遠藤ともいわれるとのこと。明るいお人柄、私達四人はここでお二人をお見送りした。

佐倉市・酒々井町 資料

遠山 成一（佐倉市文化財審議会副委員長）

本佐倉城跡国指定史跡化へのみちのり

- 1978（昭和 53）年 「本佐倉城跡」の名称に統一される（それまでは「根古谷城跡」「将門山城跡」「本佐倉城跡」「佐倉古城跡」などの呼称あり）。
- 同年 6 月 18 日 「本佐倉城址保存会」の発足
- 1980（昭和 55）年 12 月 15 日～81 年 2 月 14 日 本佐倉城跡、学術発掘をうける
「千葉県中近世城跡研究調査報告書第 1 集 佐貫城 本佐倉城」（1981 年刊行）
- 1981（昭和 56）年 7 月 28 日 千葉県文化課、酒々井町・佐倉市関係者による文化庁訪問。
- 同年 9 月 4 日 文化庁記念物課服部英雄文化財調査官（当時）の来町。
本佐倉城・臼井城の視察。
- 1987（昭和 62）年 7 月 本佐倉城址保存会、解散。
- 11 月末 町と地元・地権者の数字にわたる協議の結果、保存区域を限定する条件で保存の方向に合意すべく動きだす。また、町制 100 周年を迎える昭和 64（平成元）年に、「本佐倉城時代まつり」を地元の協力を得て実施する運びとなる。
- 1988（昭和 63）年 6 月 千葉県郷土史研究連絡協議会より「本佐倉城址の保存についての陳情」、7 月、印旛沼地域観光開発推進協議会より「本佐倉城（根古谷城）址並びに臼井城址の保存整備について」の要望が相次いで提出される。
- 1989（平成元）年 4 月 「根古谷を明るくする会」の発足（～2001 年 3 月。その後、有志による草刈り等の管理は、本佐倉城跡管理組合が新たに発足し引き継がれた）
- 5 月 28 日 「本佐倉城時代まつり」の举行
- 6 月～90 年 3 月 「本佐倉城跡周辺整備計画」の策定（ふるさと創生事業の一環として）
- 1990（平成 2）10 月～ 重要遺跡緊急確認調査（国庫補助事業）として 1993 年まで、各年度に全城域にわたりトレンチ発掘調査。95 年には『本佐倉城跡発掘調査報告書』（印旛郡市文化財センター）が刊行される。
- 1992（平成 4）年 9 月 8 日 印旛地区行政懇談会、県企画課・文化課・公園課に、本佐倉城跡を「県の施設として整備をお願いする」等の要望書を提出。

その後、県知事の視察も行なわれる。

12月8日 文化庁において、服部英雄調査官と区の指定や整備計画について、さらには整備計画の方向性についてなど協議。

12月24日 県より回答。県立施設としての実現は困難、国指定跡として、国・県の補助制度による史跡整備を使う方法を示唆。

1993（平成5）年 国指定史跡へ向けて本格的に始動。94（平成6）年度末の指定を目指し、荒上・向根古谷を含む15haが国・県からの要望として調整がすすめられる。

1994（平成6）年2月 地元説明会（根古谷を明るくする会）開催。この中で、内郭群の指定は賛同するが、荒上・向根古谷の指定は反対の旨が出される。

3月～10月 文化庁・県文化課・佐倉市・地元および酒々井町において、幾度も協議がもたれる。その結果、範囲についてⅠ期指定として内郭群、次期計画として荒上・向根古谷地区。用地買収・保存整備の円滑な運用のための保存管理計画の策定を決定（10月14日）。

11月22日 文化庁伊藤正義調査官との間に、1996年3月に文化財保護審議会への諮問をおこなうため、再度、計画工程の見直しを行うことで合意を得る。

1995（平成7）年6月 酒々井町議会に、保存管理策定業務の補正予算計上が報告され、翌7月より策定作業が開始。酒々井町と佐倉市（以下、両団体と略す）の協力のもとに、本佐倉城跡保存管理・整備基本計画策定委員会の設立、同歴史概要検討委員の選定が行なわれ、設置要綱の公布（7月28日）、両団体の間で覚書の締結（10月6日）がなされる。

1996年～2002年 国史跡指定地公有化事業の実施

1998（平成10）年9月11日 国史跡として官報に告示される

2001（平成13）年度末 今後の発掘調査や具体的な整備計画の策定作業が開始される。有識者による史跡本佐倉城跡整備実施計画策定委員会が、両団体の協力のもと組織される。また、設置要綱の公布、両団体間のK協定書の締結が行なわれる（02年2月27日）。

2003（平成15）年7月～04年3月末 酒々井町直営による発掘調査および測量図作成。城山地区・奥ノ山・東山馬場発掘調査。東山虎口・第Ⅳ郭・大堀切・城山虎口等の測量。

10月19日 国指定史跡5周年記念講演・シンポジウム開催

- 2004（平成16）年10月～05年3月末 同じく発掘調査および測量図作成。保存修理事業（斜面部の環境整備、土留め工事等）
城山郭の発掘。前年度発掘の調査報告書刊行『本佐倉城跡発掘調査報告書Ⅱ』（2004年）
- 2005（平成17）年10月～06年3月末 同じく発掘調査および測量図作成。通路環境整備工事。
史跡本佐倉城跡調査整備委員会の組織。両団体間で設置要綱の公布（9月29日）、ならびに協定書の締結が行なわれる（11月18日）。
- 2006（平成18）年10月～07年3月末 同じく発掘調査および測量図作成。保存修理事業。
城山郭および東山虎口・東光寺ビヨウの発掘調査。城山郭の樹木伐採。
- 2007（平成19）年10月～08年3月末 同じく発掘調査および測量図作成。保存修理事業。
第Ⅳ郭および城山郭木橋通路等の発掘調査。測量図作成。東山虎口斜面環境整備工事等。
- 10月5日 本佐倉城跡国指定10周年記念行事 講演会開催
- 2008（平成20）年12月～09年2月27日 同じく発掘調査および測量図作成。保存修理事業。
城山郭帯曲輪と東山虎口通路の発掘調査。および測量図作成。
- 2009（平成21）年6月～10年3月末 保存修理事業および報告書刊行
東山虎口斜面環境整備工事ほか
『本佐倉城跡発掘調査報告書Ⅲ』刊行（2010年）
- 2010・11（平成22・23）年度 本格的な復元整備に向け『本佐倉城跡整備実施計画』をもとに『基本設計書』の作成作業。

※本年表は『千葉県印旛郡酒々井町 本佐倉城跡環境整備事業報告書Ⅰ』（2013年）をもとに遠山が作成したものである。

多古町・千葉市 資料

鈴木 佐(千葉氏研究家・建長寺調査員)

多古町(下総国千田荘の中心地)

(1) 多古町の特徴

①千田荘の中心を流れる栗山川



②日蓮宗寺院が多い町

中村檀林 (日本寺)

志摩地区 不受不施派

③千葉氏の町

千葉本宗家・胤直一族

最後の地

多古城主・牛尾胤仲を
祭神に祀る町



肥前千葉氏のルーツの1つ 千田荘

【1】多古・旧栗源の地名を持つ武士たちが肥前国へ
千葉宗胤の子・胤貞の精鋭部隊

「原、飯篠、次浦、井戸山、岩部、牛尾、圓城寺」

(例) 肥前飯篠氏・・・大村藩に功績 千葉ト枕

肥前岩部氏・・・江藤新平胤雄

【2】正東山日本寺（中村檀林）

千葉胤貞開基 日祐上人開山

※正中山法華経寺

※正西山（松尾山）

光勝寺



日本寺



妙光寺
妙見菩薩像

金沢文庫と密接な関係 東禅寺

【1】千田荘 下総国でも鎌倉期最高の文教地区

東禅寺（律宗 現在真言宗智山派）

※鎌倉幕府の宗教二大柱 臨済宗・律宗。

【2】千葉氏の祈願寺

享徳の大乱 千葉胤直一族が
千田荘に！東禅寺を自害の場所。



千葉市（千葉氏の本拠）

（１）平安後期 大椎城＝緑区大椎町＝
房総平氏・平常重



2. 平安末期～室町中期
千葉城（館）諸説あり
千葉常重～千葉胤直
①千葉市中央区亥鼻町
②千葉市中央区市場町

（３）千葉輔胤 本佐倉（佐倉市・酒々井町）へ居城を移す。

（４）高篠城＝千葉市若葉区高品町
千葉昌胤 妙見宮での元服儀式の際、宿所に

主な千葉一族遺跡



妙見本宮千葉神社



氏胤・満胤墓 来迎寺



常将～胤直墓

大日寺



宗胤墓 宗胤寺

千葉市花見川区 武石町・幕張町

- ・武石町（たけしちょう）
常胤の三男・胤盛が居館



眞蔵院・浪切不動

- ・馬加（まくわり）＝幕張
室町中期 千葉康胤が
馬加に館を構える。
三山の祭礼



武石館跡・武石神社



馬加康胤首塚
江戸寛永期建立

江戸時代の千葉

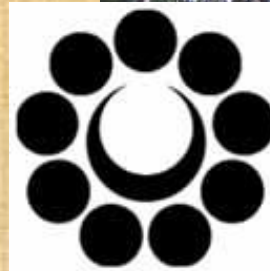
- ・ 妙見寺（妙見本宮千葉神社）の門前町
- ・ 寒川港 堀田藩の港
- ・ **江戸時代は、全国の千葉一族が訪問する地**

【1】 武石胤盛の末裔 涌谷伊達氏（宮城県）

亘理元宗・重宗・定宗・宗重・宗元



下総千葉で入手
千葉貞胤守本尊
見龍寺本尊



涌谷町：妙見宮

【2】陸奥中村藩主・相馬氏（福島県）

- ・千葉妙見寺 年始代参
- ・取手海禅寺代参
- ・小見川夕顔観音の勧請
- ・相馬歓喜寺に「下総国千葉郷妙見大縁起」

【3】美濃郡上八幡藩主・遠藤氏（岐阜県）

- （永享・享徳の乱 美濃郡上の東常縁 下総へ転線）
- ・初代・遠藤慶隆の寄進状写 東庄町にあり
- ・千葉妙見寺 年始代参／東胤禄子爵 東大社に常縁歌寄進



相馬忠胤公木像



相馬市・歓喜寺蔵
「妙見大縁起絵巻」

（久留里藩主土屋家から養子）



山内一豊妻銅像
（遠藤慶隆の妹）